

高校生における進学意識と職業意識および 親との関係の関連性

鹿 内 啓 子

高校生における進学意識と職業意識および 親との関係の関連性

鹿内 啓子

Keiko SHIKANAI

目次

- I 問題
- II 方法
- III 結果

1. 進学先決定要因尺度と学生生活重視事項尺度の因子構造
2. 進学意識と進路相談との関連性
3. 進学意識と親との関係の関連性
4. 進学先決定要因と進路決定自己効力感および職業未決定との関連性
5. 学生生活重視事項と進路決定自己効力感および職業未決定との関連性

IV 考察

[Abstract]

How the Attitudes of High School Seniors toward Entering University Are Affected by Job Consciousness and Parent-adolescent Relationships

This study investigates how the attitudes of high school seniors toward entering university relate to job consciousness and parent-adolescent relationships. One aspect of the attitudes toward entering university is affected by the reasons for entering university. The second aspect is affected by the reasons for entering a specific university. The third aspect is affected by the activities to which students attach importance in their student life. Job consciousness is composed of career decision-making self-efficacy and career indecision. A questionnaire with scales to measure these aspects was administered to senior students of a high school. Students with high self-efficacy decide to enter a specific university based on their own interests for study and are highly motivated to acquire an education and expert knowledge in student life. Students with a high score on the career indecision scale choose a specific university relying on the recommendation of their parents or teachers. In regards to parent-adolescent relationships, students of the respect-type have high motivation to both study and form friendships in student life. The reasons for entering university, on the other hand, are not affected by parent-adolescent relationships.

I 問題

少子化により18歳人口の減少が続いており、高校生の進路状況が大きく変わってきている。高学力の生徒が目指すいわゆる有名大学を除いて、大学入学試験の競争倍率は低下し、定員割れの大学・学部も増えてきている。また推薦入試やAO入試など入試制度も多様化したため、学力試験を受けないで入学してくる生徒も多くなっている。大学入学者の基礎学力の低下が問題にされ、入学前教育

や入学後のリメディアル教育に取り組む大学が増加している。このように大学入学が容易になったことは、必然的に進学目的や進学動機の多様化につながり、また大学生活の過ごし方にも関わってくる。

進学理由に関する研究は多く、進学理由(動機)尺度の検討がなされてきた(湖上, 1984a; 古澤・山下, 1993; 齊藤, 1996; 八木・齊藤・牟田, 2000; 栗山・上市・齊藤・楠見, 2001; 松島・尾崎, 2006; 三保・清水, 2011)。これらの研究で共通して見られる進

キーワード：進学意識, 進路決定自己効力感, 職業未決定, 親との関係, 高校生
Key words: Attitude toward Entering University, Career Decision-Making Self-Efficacy, Career Indecision, Parent-Adolescent Relationship, High School Students

学理由としては、興味のある分野の研究、専門知識の修得という大学本来の目的、やりたい仕事に必要な、あるいは将来役に立つかもしれない資格の取得、サークル活動やボランティア活動などの正課外の活動、やりたい仕事をみつける積極的なモトリアム、特別な目的がなくとりあえず進学するという消極的なモトリアム、家族の勧めや希望という他律的な理由などである。

鹿内(2016)では、高校3年生に対して17項目からなる進学理由尺度を実施したところ、5因子を得た。進学が当たり前で親も希望し、自分もまだ社会に出たくなく自由な時間を楽しみたいという「周囲・猶予」因子、教養の修得や学問研究、学生にしかできない活動や体験をしたいという「体験・勉学」因子、資格や専門技能の修得を逆転項目としやりたい仕事がないのでとりあえず進学するという「模索」因子、学歴や高い収入のためという「学歴・収入」因子、サークル活動や新しい友人を作るためという「サークル・友人」因子の5つである。

このような進学理由は進学それ自体への一般的、抽象的な構えであるが、その一方で実際にどの大学(短大、専門学校)に進学するかに関わる要因の検討もなされている。測上(1984b)は実際の進学先をどのような理由で決めるのかを特定大学選択動機として検討し、「志望大学の内容の充実」、「志望大学の経済的・地理的要因」、「自己実現への適合」、および「入学の可能性」の4因子を見いだしている。

また鹿内(2016)では、進学先決定要因として、世間の評判、利用したい入試制度、校風よさ、先生や先輩の勧めという、その進学先がもつさまざまな特性である「学校要因」、やりたい仕事に必要な資格や興味ある専門分野の学びを考慮する「専門分野」、通学の便利さ、授業料と家庭の経済状況の適合、親や親戚からの勧めという現実的な要因によ

る選択を示す「現実的要因」、そして「就職実績」の4因子が見いだされた。

本研究では、進学理由と進学先決定要因に加えて進学後の学生生活への構えを検討するために学生生活重視事項を取り上げる。専門分野の勉学や幅広い教養の修得という大学の本来の活動を重視することが望ましいのであるが、今の社会ではそれだけが学生に求められているわけではない。就職活動では、サークル活動、ボランティア活動、アルバイト経験など学業以外の活動によってどのような体験をし何を得たのかを自己アピールすることが企業から求められる。就職の比重が重くなっている今の学生は学生生活で何に力を入れたいと思っているのだろうか。

本研究では、進学意識を進学理由、進学先決定要因、学生生活重視事項の3側面から捉え、これらが身近な人との関係とどのように関連するのかを検討する。身近な人との関係をここでは、進路についての相談相手、および親との関係の認知によって捉える。また進路決定自己効力感および職業未決定から捉えた職業意識と進路意識との関連性も検討する。

Ⅱ 方法

1. 調査対象者

札幌市内の私立H高校の3年生全員を対象として、質問紙調査を行った。このうち今回分析の対象としたのは、4年制大学、短大、専門学校のいずれかに進学が決定している、もしくは進学を予定しているもので、回答に不備のない生徒、男子107名、女子88名、合計195名である。

2. 調査内容

調査用紙は進学する場合と就職する場合の2種類を用意し、該当するほうに回答を求めた。本報告は進学者だけを分析の対象として

いるので、進学者用の内容について述べる。

(1) 進路状況

進学する場合は、4年制大学、短大、専門学校それぞれについて、進学先が決定しているか、これから受験するのか、6つの選択肢から該当するものを選ばせた。

(2) 進路についての相談状況

進路や進学・就職先を決めるために誰かに相談したかどうかを回答させた後、相談している場合は相談相手を10名の中から5名まで選ばせた。10名は、高校の先生、小中学校の先生、塾の先生や家庭教師、父親、母親、きょうだい、友だち、先輩、親戚の人、その他である。相談していない場合は、その理由として考えられる7つの選択肢から該当するものをすべて選ばせた。

(3) 進学先決定要因尺度

特定の大学、短大、専門学校を進学先または受験先に決めた理由について、測上(1984b)を参考にして15項目の尺度を作成した。各項目について自分が当てはまる程度を5段階で評定させた。項目内容は、進学先決定要因尺度の因子構造の結果で示した。

(4) 学生生活重視事項尺度

進学後の学生生活に対する構えをみるために、学生生活の中でどのようなことを重視したいかを、20項目からなる尺度で検討した。勉学に関する項目、友人関係に関する項目、サークル活動などに関する項目、アルバイトに関する項目などから構成されている。項目の一部は、因子構造の検討の項で示した。

(5) 進路決定自己効力感尺度

富永(2006)の「進路選択自己効力感尺度」を参考にして作成した12項目について5段階評定をさせた。調査を行った1月にはすでに進路が決定していたので、進学先に在学中の自分を想定して当てはまる程度を回答させた。

2年次の6月に実施した調査のデータで因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行っ

たところ(鹿内, 2015), 2因子が抽出された。第1因子は、自分に適した職業を決めることや見通しをもってやるべきことの計画を立てて実行することに対する自信を表わす「計画・決定効力」である。第2因子は、先生や親など身近な人に進路を相談することや進学や就職の情報を集めることに対する自信を表わす「相談・情報効力」である。本報告ではこの2つの下位尺度を取り上げる。

(6) 職業未決定尺度

下山(1986)の「職業未決定尺度」から選択した31項目について、女子高校生のデータで因子分析した結果(鹿内, 2004)を参考にして15項目を選び、今の自分に当てはまる程度を5段階で評定させた。

2年次6月に実施した調査のデータについて主因子法(プロマックス回転)による因子分析を行った結果(鹿内, 2015), 3因子構造をもつと判断された。第1因子は、将来の職業をまだ決められていない状態を表わす項目が含まれるため、「未決定」因子と名付けた。第2因子は、働いている自分をイメージできないことや職業決定に対する不安を表わす「未熟・不安」因子である。第3因子は、職業について考えることに対する意欲の低さと採用してくれるならどんな職業でもよいという安易な構えを示しており、「安直・回避」尺度と名付けた。本報告ではこの3つの下位尺度を取り上げる。

3. 調査手続き

高校に依頼し、授業時間の一部を使って、授業担当教員に実施していただいた。実施時間は約15分であった。なお縦断的研究の一貫としてなされた調査であるため、記名をお願いしたが、その際には記名の必要性和プライバシーの保護について文書で理解を求めると同時に、回答済みの調査用紙は自分で封筒に入れ、封をして提出させた。

4. 調査時期 2016年1月

なお本報告では、本報告と同じ調査対象者および1学年下の2年生に対して2015年8月に実施した調査内容から、進学理由尺度を扱う。これは進学を希望する理由についての11項目からなる尺度であり、各項目について自分に当てはまる程度を5段階で評定させた。

学年を合わせて因子分析(主因子法・バリマックス回転)をしたところ、3因子構造と解釈された。第1因子は、「学生にしかできないいろいろな体験や活動がしたいから」、「新しい友人や知り合いをつくるため」など、学生ならではの活動や自由な時間を楽しみ、友人関係を広げるという理由であり、「活動・交友」因子(4項目)と名付けた。第2因子は、「将来やりたい仕事に必要な資格や専門技術を取得するため」、「興味のある分野の学問研究がしたいから」など、進学の本来的な目的である専門技能や資格の取得や研究のためという目的であり、「資格・勉学」因子(3項目)と名付けた。第3因子は、「社会に出たときに高い収入や地位を得るため」、「就職に有利な学歴を得るため」などの3項目が含まれるので、「地位・学歴」因子と名付けた。

Ⅲ 結果

以下で扱う下位尺度得点はすべて、各下位尺度に含まれる項目の評定値の合計を項目数で割った値である。得点が高いほど下位尺度名で表わされる傾向が強いことを示す。

1. 進学先決定要因尺度と学生生活重視事項尺度の因子構造

(1) 進学先決定要因尺度の因子構造

15項目について因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行ったところ、4因子構造とみなすことが妥当であると判断された。

第1因子は、利用したい入試制度があった

から、オープンキャンパスが良かったから、世間の評判が高いから、通学に便利という4項目からなる。その進学先がもつ諸要因を表わしているので、「大学要因」因子とした。第2因子には、興味ある専門分野が学べる、必要な資格が取れる、校風が自分に合っている、自分の学力レベルに合っているという4項目が含まれる。自分の関心や学力などとの適合を表わす項目からなるので、「自己適合」因子と名付けた。第3因子は、何となく決めた、高校の先生に勧められた、先輩の話を聞いて、という3項目からなり、自分の意思で決定していない内容の因子なので、「非自立要因」因子と名付けた。第4因子には、授業料が家庭の経済状況に合っている、親や親戚に勧められたから、という2項目が含まれていることから、「家庭の事情」因子とした。

(2) 学生生活重視事項尺度の因子構造

20項目について因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行ったところ、4因子構造と解釈された。

第1因子には、授業への積極的な参加、幅広い知識や教養を身につけること、見聞や体験を広げることなどに関する8項目が含まれるため、「勉学・教養」因子とした。第2因子は、新しい友人を作る、親友を作る、友人と遊んで学生生活を楽しむ、アルバイトをする、などの6項目からなることから、「友人関係・生活享受」因子と名付けた。第3因子には、学内外のサークルで活動すること、留学の3項目が含まれるので、「サークル活動・留学」因子と名付けた。第4因子は、資格の取得、専門知識の獲得、高い技能や知識の獲得の3項目からなることから、「専門知識・資格」因子とした。

2. 進学意識と進路相談との関連性

進学理由、進学先決定要因、および学生生活重視事項が周りの人々への相談状況とどのように関連しているのかを検討するために、

3尺度のそれぞれの下位尺度得点について、男女別に、主要な相談相手である高校教員、父親、友だちへの相談の有無による独立したサンプルの*t*検定を行った。なお母親は重要な相談相手であるが、ほとんどの生徒が相談しているため、相談の有無は検討できなかった。

教員への相談に関しては、進学理由の「活動・交友」で相談している男子生徒 ($M=3.38, SD=0.99$) は相談していない男子生徒 ($M=2.86, SD=1.07$) より得点が高かった ($t[97]=2.26, p<.05$)。「資格・研究」および「地位・学歴」では有意差がみられなかった。女子では進学理由のどの因子でも相談の有無の効果は見られなかった。また進学先決定要因および学生生活重視事項ではどの下位尺度得点でも、また男女いずれでも相談の有無による差異は有意ではなかった。教員への相談率は70～80%であり、大部分の生徒が教員に相談しているため、相談の有無による差異がほとんどみられなかったのであろう。

父親への相談の有無に関しては、進学理由では男女ともどの下位尺度でも相談の有無による有意差がみられなかった。男子の進学先決定要因の「非自立要因」で有意となった。父親に相談している男子生徒 ($M=2.20, SD=0.89$) より相談していない男子生徒 ($M=2.75, SD=1.00$) のほうが「非自立要因」得点が有意に高い ($t[105]=3.00, p<.001$)。男子については他の下位尺度得点では有意差はみられなかった。女子については、進学先決定要因の「家庭の事情」で父親に相談している生徒 ($M=2.97, SD=0.87$) は相談していない生徒 ($M=2.55, SD=1.02$) より有意に高い ($t[86]=2.01, p<.05$)。学生生活重視事項の「勉学・教養」でも有意差がみられ、父親に相談している女子生徒 ($M=4.09, SD=0.50$) は相談していない生徒 ($M=3.80, SD=0.58$) よりも得点が高い ($t[86]=2.42, p<.05$)。また「友人関係・生活享受」につい

て有意差がみられ、父親に相談している女子生徒 ($M=4.37, SD=0.54$) のほうが相談していない女子生徒 ($M=3.96, SD=0.64$) より得点が有意に高い ($t[86]=3.08, p<.01$)。

友だちへの相談に関しては、進学理由では、男子の「活動・交友」で有意差がみられ、友だちに相談している男子生徒 ($M=3.47, SD=1.04$) は相談していない生徒 ($M=3.06, SD=1.00$) より得点が高い ($t[97]=1.98, p<.05$)。また女子の「資格・研究」でも有意差があり、友だちに相談している女子生徒 ($M=4.14, SD=0.86$) のほうが相談していない生徒 ($M=3.72, SD=0.82$) より得点が高い ($t[76]=2.02, p<.05$)。また男子の学生生活重視事項の「勉学・教養」因子で有意差がみられ、友だちに相談している男子生徒 ($M=4.22, SD=0.58$) は相談していない男子生徒 ($M=3.92, SD=0.74$) より有意に得点が高い ($t[105]=2.29, p<.05$) のである。他の下位尺度得点については、友だちへの相談の有無の差異はみられなかった。

3. 進学意識と親との関係の関連性

進学意識が生徒の親との関係の認知とどのように関連しているのかを検討するために、親との関係の認知に基づく4タイプを独立変数とし、進学意識の3尺度のそれぞれの下位尺度得点を従属変数とした1要因4水準の分散分析を行った。各タイプのサンプル数が多くないため、男女を合わせて分析した。

4タイプは、親をモデルとみなしコミュニケーションも多く、指図は少ないと感じている尊敬親密型、親とのコミュニケーションが少なく親から指図されていると認知している干渉型、親とのコミュニケーションはあまり多くないが指図も受けていないと認知している独立型、親とのコミュニケーションも指図の認知も中程度の平均型の4つである。

各タイプの下位尺度の平均値と分散分析の結果を示したものが、表1～表3である。

表 1 で進学理由についてみると、「活動・交友」因子で関係タイプの効果が有意であった。多重比較の結果、平均型が干渉型よりも有意に得点が高かった。他のタイプ間の差は有意ではなかった。「資格・勉学」と「地位・学歴」ではタイプの効果は有意でなかった。

次に進学先決定要因(表 2)に関しては、「自己適合」因子で関係タイプの効果が有意であった。多重比較の結果、尊敬親密型が平均型より有意に得点が高い。他のタイプ間の差は有意でなかった。また「家庭の事情」因子で関係タイプの効果が有意であり、多重比較によれば独立型が他の 3 つのタイプいずれよりも有意に得点が低かった。尊敬親密型、平均型、干渉型の間には有意差はみられなかった。また「非自立要因」については関係タイプの効果が有意な傾向にあり、尊敬親密型が干渉型よりも得点が低い傾向にあった。「大学要因」については関係タイプの効果がみられなかった。

表 3 によって学生生活重視事項の結果をみ

ると、「勉学・教養」因子で関係タイプの効果が有意であった。多重比較の結果、尊敬親密型が他の 3 タイプより有意に高い得点であった。他の 3 タイプ間には有意差はみられなかった。「友人関係・生活享受」因子についても関係タイプの効果が有意であり、尊敬親密型が干渉型よりも有意に高い得点であった。「専門知識・資格」についても関係タイプの効果が有意であった。多重比較によれば、尊敬親密型の得点が他の 3 タイプより有意に高かった。他の 3 タイプ間には有意差はみられなかった。「サークル活動・留学」については、関係タイプの効果が有意にならなかった。

4. 進学先決定要因と進路決定自己効力感および職業未決定との関連性

ここでは進学先決定要因について、進路決定自己効力感および職業未決定との関連性を検討するために、進学先決定要因のそれぞれの下位尺度得点を従属変数とし、進路決定自

表 1 親との関係タイプによる進学理由の比較

	活動・交友		資格・研究		地位・学歴	
	<i>M</i> (<i>SD</i>)		<i>M</i> (<i>SD</i>)		<i>M</i> (<i>SD</i>)	
尊敬親密型 (55)	3.28 (0.99)		4.19 (0.87)		3.75 (0.73)	
独立型 (34)	3.27 (1.01)	<i>F</i> (3,190) =3.69*	3.85 (0.98)	<i>F</i> (3,190) =1.33	3.43 (0.90)	<i>F</i> (3,190) =1.35
干渉型 (54)	3.03 (0.95)	平均>干渉	3.99 (0.90)		3.54 (0.76)	
平均型 (51)	3.61 (0.65)		3.90 (0.93)		3.63 (0.71)	

* : $p < .05$

表 2 親との関係タイプによる進学先決定要因の比較

	大学要因		自己適合		非自立要因		家庭の事情		
	<i>M</i> (<i>SD</i>)		<i>M</i> (<i>SD</i>)		<i>M</i> (<i>SD</i>)		<i>M</i> (<i>SD</i>)		
尊敬親密型 (49)	3.63 (0.91)		3.99 (0.67)		2.17 (0.90)		3.23 (0.92)		
独立型 (24)	3.11 (0.96)	<i>F</i> (3,162) =2.11	3.58 (0.78)	<i>F</i> (3,162) =3.34*	2.35 (0.84)	<i>F</i> (3,162) =2.19†	2.13 (0.90)	<i>F</i> (3,162) =6.92***	
干渉型 (47)	3.52 (0.74)		3.70 (0.54)	尊敬>平均	2.63 (0.99)		2.78 (1.15)		独立<尊敬, 干渉, 平均
平均型 (46)	3.49 (0.74)		3.61 (0.77)		2.52 (0.98)		2.83 (0.90)		

*** : $p < .001$, * : $p < .05$, † : $p < .10$

表 3 親との関係タイプによる学生生活重視事項の比較

	勉学・教養		友人関係・生活享受		サークル活動・留学		専門知識・資格			
	<i>M</i> (<i>SD</i>)		<i>M</i> (<i>SD</i>)		<i>M</i> (<i>SD</i>)		<i>M</i> (<i>SD</i>)			
尊敬親密型 (49)	4.31 (0.62)		4.37 (0.75)		3.73 (1.08)		4.80 (0.41)			
独立型 (24)	3.80 (0.52)	<i>F</i> (3,162) =8.99***	4.01 (0.63)	<i>F</i> (3,162) =3.92**	3.75 (0.93)	<i>F</i> (3,162) =0.51	4.36 (0.80)	<i>F</i> (3,162) =8.39***		
干渉型 (47)	3.72 (0.65)		尊敬>平均, 独立, 干渉	3.95 (0.68)	尊敬>干渉		3.55 (0.86)		4.19 (0.73)	尊敬>平均, 独立, 干渉
平均型 (46)	3.98 (0.54)			4.26 (0.56)			3.77 (0.79)		4.41 (0.55)	

*** : $p < .001$, ** : $p < .01$

己効力感の「計画決定効力」と「相談情報効力」、および職業未決定の「未決定」、「未熟・不安」、「安直・回避」の5つの下位尺度得点のそれぞれの高低2群と性別を独立変数とした2要因の分散分析を行った。高低群分けは高群と低群の人数がほぼ等しくなるように、それぞれの下位尺度得点で2分した。なお性別の有意な主効果がいくつか得られたが、ここでは自己効力感と職業未決定に焦点を当てて検討するので、性別の効果は取り上げないことにする。また高低群×性別の交互作用効果は進学意識のどの下位尺度でも、また計画決定効力でも相談情報効力でも有意にならなかった。各群の下位尺度得点の平均値と高低群の主効果については、表4に示した通りである。

まず計画決定効力の高低群の主効果が、「自己適合」で有意であった。高群で低群より自己適合得点が高い。相談情報効力についても「自己適合」で高低群の主効果が有意であり、高群の得点が低群より高い。また「家庭の事情」では有意な傾向がみられ、ここでも高群の得点のほうが高い。

未決定については、「自己適合」と「非自立要因」で高低群の主効果が有意であった。未決定高群は低群に比べて自己適合得点が低く、非自立要因得点が高いのである。次に未熟・不安の高低群の主効果も「自己適合」と「非自立要因」で有意であり、高群は低群より「自

己適合」得点が低く、「非自立要因」得点が高いのである。安直・回避の主効果は、「非自立要因」と「家庭の事情」で有意であった。安直・回避の高群のほうが「非自立要因」得点も「家庭の事情」得点も高かった。

5. 学生生活重視事項と進路決定自己効力感および職業未決定との関連性

進路決定自己効力感と職業未決定が学生生活重視事項とどのように関連しているのかを検討するために、進路決定自己効力感と職業未決定の5つの下位尺度の高低群と性別を独立変数にし、学生生活重視事項の各下位尺度得点を従属変数とした高低群×性別の2要因の分散分析を行った。ここでも性別の主効果については言及しない。また交互作用効果はどの下位尺度でも有意にならなかった。表5に各群の平均値と高低群の主効果を示した。

計画・決定効力の高低群の主効果は4つのすべての下位尺度で有意であり、いずれについても高群の得点が低群より高いのである。また相談情報効力の高低群の主効果が「勉学・教養」、「友人関係・生活享受」、「専門知識・資格」の3つで有意となった。いずれも高群の得点のほうが高くなっている。

職業未決定に関しては、未決定の高低群の主効果が「勉学・教養」と「専門知識・資格」で有意であり、どちらの得点についても高群が低群より低い。未熟・不安についてはどの

表4 進路決定自己効力感および職業未決定の高低群の進学先決定要因の比較

			大学要因		自己適合		非自立要因		家庭の事情	
			M (SD)	高低群の主効果	M (SD)	高低群の主効果	M (SD)	高低群の主効果	M (SD)	高低群の主効果
進路決定自己効力感	計画・決定効力	高群 (95)	3.43 (0.91)	F (1,191) =0.07	3.99 (0.69)	F (1,191) =25.47***	2.26 (0.91)	F (1,191) =2.34	2.93 (1.08)	F (1,191) =2.22
		低群 (100)	3.47 (0.79)		3.50 (0.67)		2.49 (0.99)		2.68 (1.01)	
	相談・情報効力	高群 (106)	3.53 (0.85)	F (1,191) =2.71	3.89 (0.76)	F (1,191) =9.64**	2.30 (0.91)	F (1,191) =1.90	2.94 (1.10)	F (1,191) =3.44†
		低群 (89)	3.35 (0.84)		3.56 (0.63)		2.48 (1.00)		2.63 (0.97)	
職業未決定	未決定	高群 (97)	3.53 (0.85)	F (1,191) =1.89	3.60 (0.73)	F (1,191) =7.94**	2.61 (1.00)	F (1,191) =11.35**	2.91 (1.00)	F (1,191) =1.65
		低群 (98)	3.37 (0.85)		3.88 (0.69)		2.15 (0.85)		2.69 (1.09)	
	未熟・不安	高群 (103)	3.42 (0.90)	F (1,191) =0.22	3.61 (0.70)	F (1,191) =6.83**	2.51 (1.00)	F (1,191) =4.32*	2.86 (1.04)	F (1,191) =0.85
		低群 (92)	3.48 (0.79)		3.89 (0.72)		2.23 (0.89)		2.73 (1.06)	
	安直・回避	高群 (102)	3.49 (0.85)	F (1,191) =0.62	3.77 (0.72)	F (1,191) =0.44	2.71 (0.92)	F (1,191) =27.94***	3.07 (0.99)	F (1,191) =15.38***
		低群 (93)	3.41 (0.85)		3.70 (0.72)		2.02 (0.86)		2.51 (1.04)	

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$, †: $p < .10$

表 5 進路決定自己効力感および職業未決定の高低群の学生生活重視事項の比較

			勉学・教養		友人関係・生活享受		サークル活動・留学		専門知識・資格	
			M (SD)	高低群の主効果	M (SD)	高低群の主効果	M (SD)	高低群の主効果	M (SD)	高低群の主効果
進路決定 自己効力 感	計画・決定 効力	高群 (95)	4.23 (0.61)	$F(1,191)=29.07^{***}$	4.34 (0.66)	$F(1,191)=9.83^{**}$	3.93 (0.92)	$F(1,191)=11.98^{***}$	4.63 (0.54)	$F(1,191)=16.04^{***}$
		低群 (100)	3.76 (0.59)		4.04 (0.68)		3.47 (0.92)		4.27 (0.70)	
	相談・情報 効力	高群 (106)	4.19 (0.59)	$F(1,191)=24.51^{***}$	4.28 (0.67)	$F(1,191)=4.04^*$	3.78 (0.93)	$F(1,191)=1.71$	4.59 (0.52)	$F(1,191)=11.77^{***}$
		低群 (89)	3.75 (0.62)		4.07 (0.69)		3.59 (0.97)		4.27 (0.74)	
職業 未決定	未決定	高群 (97)	3.84 (0.64)	$F(1,191)=10.79^{***}$	4.13 (0.66)	$F(1,191)=1.56$	3.65 (0.86)	$F(1,191)=0.47$	4.25 (0.70)	$F(1,191)=18.56^{***}$
		低群 (98)	4.13 (0.61)		4.24 (0.71)		3.74 (1.03)		4.63 (0.53)	
	未熟・不安	高群 (103)	3.94 (0.66)	$F(1,191)=1.32$	4.24 (0.68)	$F(1,191)=1.11$	3.71 (0.93)	$F(1,191)=0.08$	4.38 (0.68)	$F(1,191)=2.33$
		低群 (92)	4.04 (0.61)		4.13 (0.69)		3.68 (0.97)		4.52 (0.61)	
	安直・回避	高群 (102)	3.91 (0.68)	$F(1,191)=3.08^†$	4.15 (0.72)	$F(1,191)=0.77$	3.71 (0.88)	$F(1,191)=0.05$	4.37 (0.69)	$F(1,191)=2.62$
		低群 (93)	4.07 (0.59)		4.23 (0.64)		3.68 (1.01)		4.52 (0.60)	

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$, †: $p < .10$

下位尺度でも高低群の有意な主効果はみられなかった。安直・回避については「勉学・教養」で高低群の主効果が有意な傾向にあり、高群の得点のほうが低い。他の3下位尺度では有意な主効果はみられなかった。

IV 考察

1. 進路相談と進学意識との関連性

教員、父親、友だちへの相談の有無による進学意識の違いについては、いくつかの有意な差がみられたが、相談相手および進学意識の因子に関して一貫した結果はみられなかった。女子の友だちへの相談が進学理由の「資格・研究」の高いことと、また女子の父親への相談、および男子の友だちへの相談が学生生活での「勉学・教養」の高い得点と関連しており、相談が大学の本来的な機能への態度の高さと関連している傾向が見られたが、限定的な関係にとどまった。つまり誰への相談が進学意識のどの側面と関連しているのかについては、明らかにならなかった。鹿内(2016)では、本研究と進学理由の因子が異なるが、教員、父親、友だちに相談している生徒は相談していない生徒より進学理由の「体験・勉学」の得点が高くなっており、相談することが進学の本来的目的への意識の高さと結びついていたが、本研究ではこのような一貫した結果は得られなかった。

2. 親との関係型と進学意識との関連性

親との関係型は進学意識と強い関係を持つことが示された。尊敬親密型は進路決定要因の「自己適合」で平均型より得点が高い。また学生生活重視事項の「勉学・教養」、「専門知識・資格」では他の3つのタイプより得点が高く、「友人関係・生活享受」では干渉型より高い得点であった。尊敬親密型は進学先を決める際には自分の興味・関心や校風、学力に照らして進学先を選んでおり、また進学後の学生生活に対して進学本来の目的である勉学に対する動機づけが高く、また友人関係や大学生ならではの生活にも意欲的である。尊敬親密型は親を社会人モデルとみなして高く評価し親とのコミュニケーションもよくなされているタイプである。したがって親からポジティブで意欲的な生活態度を学んでおり、また親とのコミュニケーションを通して目標が定まり、進学後の学生生活に対して目的が明確な意欲的な態度が形成されるのであろう。

しかし進学理由、進学先決定要因、学生生活重視事項の進学意識の3側面と、親との関係タイプとの関連性の強さに違いがみられた。進学理由では「活動・交友」因子で平均型が干渉型より高いという結果であったが、なぜ平均型が高いのかは不明である。また他の2つの下位尺度では有意な結果が得られておらず、進学理由については望ましい親との

関係の認知が積極的な進学理由と結びついていない。進学先決定要因では、「自己適合」で尊敬親密型が高く、「非自立要因」でも有意な傾向の効果がみられ、有意な差にはならなかったが、尊敬親密型で得点をもっとも低く、干渉型でもっとも高いという、親との望ましい関係の認知が主体的な進学先決定と関連することを示唆する結果である。「家庭の事情」では独立型が他の3型よりも低い得点であった。これは独立型の特徴が、親の意向の圧力も受けず親子間のコミュニケーションも少ないということから、独立型が家庭の事情をもっとも考慮しないことを示すものである。これに対し学生生活重視事項では、「勉学・教養」と「専門知識・資格」で尊敬親密型が他の3つの型よりも有意に高い得点であり、「友人関係・生活享受」でも尊敬親密型は干渉型よりも有意に高い得点を示した。このように学生生活重視事項では親との望ましい関係を認知している生徒は学生生活の学業の面で意欲的であり、また友人関係や学生生活を楽しむことにも積極的である。

なぜ進学意識の側面によって親との関係の認知との関連性の強さが異なるのだろうか。高校卒業後の進路が多様であり、進学が選択肢の一つである場合には、進学理由も含めていろいろ考えた上で進学を決めるであろう。しかし本調査の対象者では進学率が96.6%であり、ほとんどの生徒が進学するので、進学が当たり前の進路となっている。したがって一部の生徒は明確な理由があって進学するのであるが、多くの生徒にとって進学は当然の道であり特別な理由は意識されないと思われる。また進学理由は一般的で抽象的な事柄であり、個人の態度は反映されにくく、一般的な回答が生じやすいこともあるだろう。これに対して学生生活重視事項は進学後の学生生活をどのように送るかという態度に関わることであり、そこには個人の学生生活に対する構えや意欲が反映する。進学先を卒業した

後の見通しの明確さとも関連するであろう。親が社会人のモデルと成り得ていれば、社会人として働く自分のイメージも明確になり、それは学生生活への意欲を高めるであろう。

3. 進路決定自己効力感および職業未決定と進学意識との関連性

進路決定自己効力感の計画・決定効力と相談・情報効力はともに進学先決定要因の「自己適合」と関連しており、効力の高い群が自分のやりたいことや校風、学力などとの適合を考慮して進学先を決めている。また学生生活重視事項の「勉学・教養」、「専門知識・資格」、「友人関係・生活享受」でどちらの自己効力についても高群が有意に重視している。また計画・決定効力の高群は「サークル活動・留学」でも有意に高い得点であった。効力感の高い生徒は大学生活の学業に対して意欲的であり、また特に計画・決定効力の高い生徒は友人関係や学生ならではの時間を楽しむことにも積極的である。将来の目標が決まっており、その実現に向かって必要な計画を立てて実行し、また必要な情報を他者から得ていく自信のあるものは、自分の目標実現との関係で進学先を選び、進学後の学生生活に対しての動機づけが高くなるであろう。

職業未決定と進学意識との関連性については、「未決定」、「未熟・不安」、「安直・回避」のいずれでも、これらの高い生徒のほうが進学先決定要因の「非自立要因」得点が高く、また「未決定」と「未熟・不安」の高い生徒は「自己適合」得点が低かった。すなわち将来のやりたい事が決まっておらず働く自分の姿が曖昧で自信が低い生徒は、進学先を自分の興味に合うかどうかで主体的に決めることができず、周りの人からの勧めなどで決める傾向が強いのである。学生生活重視事項と職業未決定との関連については進学先決定要因との関連よりも弱く、「未決定」の高い生徒が「勉学・教養」および「専門知識・資格」

の得点が低いという関係だけがみられた。将来の目標が決まっていなければ、進学先での学業への意欲は高くないのは十分肯けることである。

〔謝辞〕

調査にご協力くださいましたH高等学校の先生方と生徒の皆様にご心から感謝申し上げます。

引用文献

- 測上克義 (1984a). 進学志望の意思決定過程に関する研究 教育心理学研究, 32, 59-63.
- 測上克義 (1984b). 大学進学決定におよぼす要因ならびにその人的影響源に関する研究 教育心理学研究, 32, 228-232.
- 古澤照幸・山下利之 (1993). 女子高校生の進路志望動機と進路決定 社会心理学研究, 8, 98-106.
- 栗山直子・上市秀雄・齋藤貴浩・楠見孝 (2001). 大学進学における進路決定方略を支える多重制約充足と類推 教育心理学研究, 49, 409-416.
- 松島るみ・尾崎仁美 (2006). 大学進学動機による学習意欲・授業選択態度・重視活動の変化について 京都ノートルダム女子大学心理学部・大学院心理学研究科研究誌「プシケター」, 5, 13-24.
- 三保紀裕・清水和秋 (2011). 大学進学理由と大学での学習観の測定—尺度の構成を中心として— キャリア教育研究, 29, 43-55.
- 齊藤浩一 (1996). 大学志望動機の高等学校間格差に関する実証的研究 進路指導研究：日本進路指導学会研究紀要, 17, 28-36.
- 鹿内啓子 (2004). 女子高校生の進路選択に関わる要因 北星学園大学文学部北星論集, 41, 13-28.
- 鹿内啓子 (2015). 高校生における先生・親への進路相談と進路意識との関連 北星学園大学文学部北星論集, 52, 1-9.
- 鹿内啓子 (2016). 高校生における進学意識と進路決定自己効力感および職業未決定との関連 北星学園大学文学部北星論集, 53, 35-46.
- 下山晴彦 (1986). 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究, 34, 20-30.
- 富永美佐子 (2006). 高校生のための進路選択自己効力尺度の作成—内容的妥当性・併存的妥当性の検討から— 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 54, 355-375.
- 八木晶子・齋藤貴浩・牟田博光 (2000). 高校生の大学進学志望動機と進学情報の有用度との関連に関する分析 進路指導研究, 20, 1-8.